

東北水産研究レター No.24

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2000391

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



東北水産研究レター No.24 (2012. 6)

岩手県および宮城県におけるサケふ化場復興支援活動

東日本大震災では、沿岸部にあった多くのふ化場が津波により大きな被害を受け（図1）、岩手県と宮城県では放流事業を見合わせるふ化場があった一方で、早期に復旧を決断したふ化場もありました。



図1 津波により構内が瓦礫だらけになった岩手県宮古市の津軽石ふ化場

復旧は、秋の親魚捕獲から、受精卵や仔稚魚の管理を経て、春の放流までの一連の工程に間に合わせる必要があります。不安もありましたが、秋には各地の増殖河川でサケの回帰も確認されました（図2）。



図2 岩手県野田村の安家川へ回帰したサケの親魚

しかし、その後、親魚の遡上が低調で種卵が不足したり、飼育に使う井戸水に塩分が混じるといった問題も生じました。

このため両県では、県や増殖団体が、ふ化場間での種卵や稚魚の移殖を促して過不足を調整するほか、井戸が塩水化したふ化場では、受精卵を内陸の試験場へ預かってもらうなどの対策も取られました。

水産総合研究センターは、分野別チームを編成

して復興支援活動に取り組むこととし、私たちさけます調査普及グループは、「さけますふ化放流チーム」に所属して、北海道区水産研究所および日本海区水産研究所と連携し、①ふ化場の被災調査を行って（図3）復旧の見通しや今後の課題などを県および増殖団体へ報告、②ふ化場の生命線である井戸復旧の可能性を先導的に調査して両県へ助言、③卵に及ぼす塩分の影響実験の結果を踏まえた危険回避策の助言、④施設整備の留意点の助言、⑤ふ化槽の無償貸与、⑥県の生産体制検討会への参加などを実施しました。



図3 被災ふ化場での現地実態調査
ふ化室を応急復旧して卵の収容をしていた宮城県本吉町の小泉ふ化場

平成24年度も関係機関との連携を図りながら、支援活動を継続します。また、サケふ化放流事業の収益性向上を目的としたプロジェクト研究もスタートします。私達もこれに参画し、復興に役立ちたいと考えています。

（さけます調査普及グループ長 藤瀬 雅秀）



この業務に取り組んでいるさけます調査普及グループの戸田修一主任技術員、八重樫博文主任技術員、羽賀正人主任技術員、荒内勉主幹技術員、藤瀬雅秀グループ長（左から）

コンテンツ

- ①岩手県および宮城県におけるサケふ化場復興支援活動
- ②カキ・ホタテ・ホヤの天然採苗の支援調査



独立行政法人
水産総合研究センター

編集：東北区水産研究所

カキ・ホタテ・ホヤの天然採苗の支援調査

北海道から宮城県までの被災道県では、ワカメ・コンブ等の海藻とカキ・ホタテ・ホヤ等の貝類等の養殖業が重要産業です。特に貝類等の養殖では、養殖筏の流失により親貝が減少し、海況の変化もあり、養殖業の早期復興の浮沈を握っている種（タネ）の確保が懸念されます。

そこで、水産総合研究センター東北水産研究所では、宮城県漁業協同組合や地方独立行政法人北海道総合研究機構函館水産研究所等と協力し、カキ、ホタテ、ホヤについて、震災後の母貝等の状況、幼生の輸送にかかわる海洋環境、種苗発生状況を調べました。

宮城県では養殖カキが母貝として重要です。その数は、震災前に比べて1/3に減少していましたが、それでも1950年代の倍程度はあるため、十分な産卵は可能と推定されました（図1）。

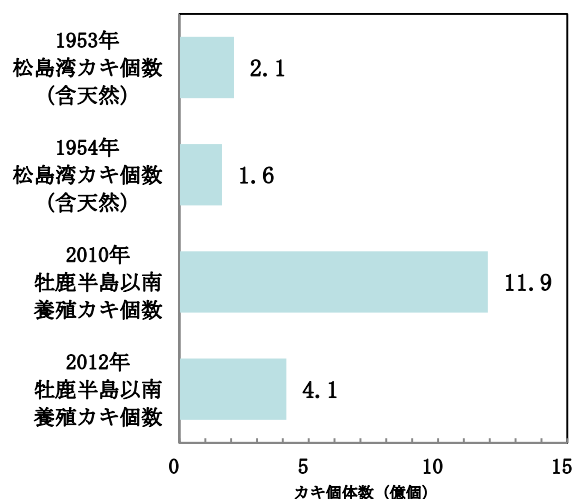


図1 宮城県牡鹿半島以南主要養殖産地のカキ個体数

6月から始まるカキ採苗に向けて石巻湾に海流ブイを設置し、カキの成熟と産卵に重要な水温や流向・流速情報をリアルタイムで漁業者に提供し続けているので、是非ホームページでご確認ください。

(<http://tnfri.fra.affrc.go.jp/kaiyo/shubyo/index.html>)

このホームページでは、ホタテ採苗のために重要な北海道噴火湾、岩手県重茂、越喜来、ホヤ採苗に重要な宮城県歌津の最新情報も掲載しています。

ホタテの採苗には、親貝量よりも冬季の植物プランクトン量が重要なことを明らかにし、それが多かった今年4～6月のホタテ採苗は好調が期待されることを報告しました。

宮城県鮫浦湾では親ホヤ量の推定を行い、震災前の約1/10に減少していることを明らかにしました。鮫浦湾におけるホヤ浮遊幼生調査では、平年よりやや少ないものの採苗が可能な程度の発生があったことを確認しました（図2・図3）。



図2 ホヤの幼生（矢印）

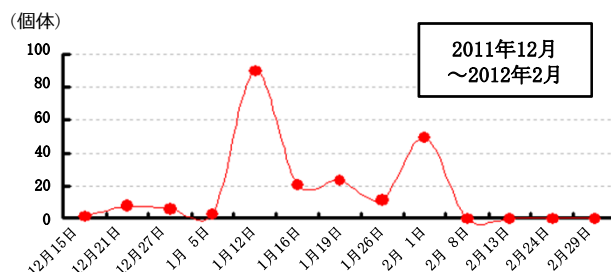


図3 鮫ノ浦湾における2011～2012年のホヤ浮遊幼生の出現経過（垂直2回曳き）

これらの養殖業の復興のために、道県の水産研究機関と連携し、今後も調査研究を続けていきます。

（増養殖研究所 資源生産部長 栗田 博）



東北水産研究レター No.24（平成24年 6月発行）

（編集）独立行政法人水産総合研究センター 東北水産研究所 業務推進部 （発行）独立行政法人水産総合研究センター 〒985-0001 宮城県塩釜市新浜町3-27-5 TEL. 022-365-1191 FAX. 022-367-1250

ホームページ <http://tnfri.fra.affrc.go.jp/>